

# 礼拝における聖書朗読



司祭 ヨハネ 井田 泉

# 聖書の中に記された聖書朗読

## その1

聖書の中に、聖書が朗読される場面が何カ所か出て来ます。

まず、イエスさまご自身が故郷ナザレの会堂礼拝で聖書を朗読されました。預言者イザヤの巻物を開くと次の箇所が目にとまりました。

「主の霊がわたしの上におられる。

貧しい人に福音を告げ知らせるために、

主がわたしに油を注がれたからである。」ルカ 4:16 - 19

イエスは巻物を巻き、係の人に返して席に座られたのですが、朗読を聴いた人々はその聖書の言葉に気持ちが動かされ、イエスさまが何かを語ってくれるに違いないと期待しました。会堂にいるすべての人の目が、イエスさまに注がれました。聖書の言葉を新鮮な驚きをもって聴くのは幸せなことです。

聖書の朗読はイエスさまがなさったことを受け継ぐことです。

「<sup>りゅうちょう</sup>流暢」に読めるかどうかは問題ではありません。そこに集まったみんなが聖書の言葉に触れることができるように奉仕する、大切な働きです。

## その2

第2の重要な箇所は、旧約聖書ネヘミヤ記第8章です。時代は紀元前5世紀半ば。場所はエルサレムの水の門の前の広場です。夜明けから正午まで律法の書が朗読されました。大勢の人々が一人の人のようになって、立ったまま聴いていました。朗読の中心

になったのは祭司エズラです。

「彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。

『今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。』民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。彼らは更に言った。

『行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。』ネヘミヤ 8:8 - 10  
聖書の朗読を聞いて人々は泣きました。そこに自分たちのことが語られていると感じたからです。

同時に、聖書の朗読を中心とした礼拝が、貧しい人たちとの食事の分かち合いにつながっていることにも注目しましょう。

二千年、三千年前の言葉がわたしたちのためのいのちの言葉になる。その橋渡しをするのが聖書朗読者です。それを実現してくださるのは聖霊です。

### その3

第3の重要な箇所は、預言者エレミヤに関する記述です。紀元前 600 年ころのこと、エレミヤはエルサレム神殿への出入りを禁じられていました。彼がイスラエルの過ちを厳しく指摘し、神に帰るように強く促したからです。エレミヤは、イスラエルの国

と宗教の秩序を破壊する危険人物とみなされたのです。

そこでエレミヤは、彼の弟子にして同労者バルクに口述筆記させ、その巻物を持ってエルサレム神殿に行くように命じました。バルクは神殿に行き、巻物に記されたエレミヤの言葉を朗読しました。それを聞いた人々は非常な衝撃を受け、ユダ王国の高官に伝えました。高官たちがバルクを招いたので、彼は高官たちの前でそれを朗読しました。

**「その言葉をすべて聞き終わると、彼らは皆、おののいて互いに顔を見合わせ、バルクに言った。『この言葉はすべて王に伝えねばならない。』」エレミヤ 36:16**

彼らはバルクに、エレミヤとともに身を隠すように言いました。命が危ういと感じたからです。

ヨヤキム王は巻物を持って来るように命じました。ユディが 3、4 欄読み終わるごとに、王はナイフで巻物を切り裂いて暖炉の火にくべ、ついに巻物全体を燃やしてしまいました。

**「このすべての言葉を聞きながら、王もその側近もだれひとり恐れを抱かず、衣服を裂こうとしなかった。」エレミヤ 36:24**

神の言葉を拒絶した恐ろしい出来事です。このようなことがあつてはなりません。

パウロはテモテにこう言いました。

**「わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念なさい。」テモテへの手紙一 4:13**

再び主イエスが来られるまで、わたしたちは聖書の朗読とみ言葉を聴き学ぶことを、大切に継続していきたいと思います。

## 聖書の朗読の要点

- ①朗読者自身が自分自身の心と身体でそれを受けとめる（朗読者自身が聴く）。
- ②自分の声によって聖書の言葉と内容をはっきりと会衆に届ける。

## 聖書朗読の指針

- (1) 聖書テキストの語りかけに自分自身が耳を傾けるようにして読む。

朗読者は読み手、語り手であるとともに、聖書の真実な聴き手であることが大切。自分が声を発しながら、同時に自分の心にその言葉をゆっくりと受けとめていく。これが大切にされないと、聴衆にとっても聞きづらいものになる。
- (2) 会衆とともに聞くことを大切に。
- (3) ことさらな演技（？）は避ける。会衆に無理に押しつけない。自分の側であらかじめ「味付け」をしない。たとえば勧告的な内容の場合、朗読者が自ら「勧告」しようとして、神の側、預言者・使徒の側に立って「教訓的に」「教えて聞かせる」ように読むと、不自然な、過剰で不愉快な空気が生まれる。

しかし機械的に読むのではない。内容に伴った、それにふさわしい発声（言葉・内容そのものが促し引き起こすイメージ・声・強調……）がある。
- (4) 読む前の準備を丁寧に。

内容を理解すること。発音しにくい箇所、聞いてわかりにくい箇所のチェック。

(5) 場所、会衆に応じた必要・適切な声の大きさに注意する。一番後ろの人にはっきりと届くように。また反対に、狭い場所での大きすぎる声は会衆を圧迫することになる。

(6) **速さと間に注意。**

聖書テキストが朗読者の声を通して聞き手の鼓膜に届き、内容とイメージをもってその心にしみ込んでいく—それにふさわしい時間がある。

(7) 朗読している言葉、その場所に朗読者自身が存在すること。

先へ急がない。「前のめり」にならない。

(8) 言葉のまとまりやつながりを大切にする。

つかえないために、いくらか先を見ながら読むこともよい。ただし前項に留意。

(9) 口をよく開き（マタイ 5:2）、舌などの音声器官をよく動かして明瞭に発音する。

はっきりと届く言葉は聴き手に対して影響力を持つ。不明瞭であいまいな言葉や声は、聖書の内容を損ってしまうことなる。

子音の発音を明確にすると伝わりやすい。

(10) のどやからだ全体に余分な力を入れないようにする。のどに力が入って緊張すると、聞き手にある種の圧迫を与えることになりやすい。からだの深いところから、全身から声をゆったりと出すようにしたい。深呼吸や伸びをして、からだをほぐすのもよい。口、目、鼻など、あらゆる器官を大きく開くようにしてみる。

(11) 声を前に向かって（会衆に向かって）出す。

(12) 聴き手が聖書を見なくても、朗読を聞くことによってイメージと意味が立ち現れるようでありたい。

(13) 礼拝における聖書朗読は神の言葉の宣教にあずかる（参

- 加) ことであるから、祈りをもって備えることがふさわしい。
- (14) 「間違えてはならない」「上手に読まなければ」とする必要はない。不十分さ、弱さを持ったありのままの人間として、神は私たちが喜んで用いてくださる。
- (15) 普段から詩などを声を出して読み、楽しむとよい。言葉の感覚を磨き、言葉と声とからだの深い関係を自分なりに把握したい。(例ー谷川俊太郎『ことばあそびうた』)

## 聖書朗読に際して注意すべき具体例

- (1) 語尾が消えやすいので注意する。(「すべて定められた時がある。」コヘレトの言葉 3:1)
- (2) 「われら」「彼ら」の「れ」または「ら」が消えやすいので注意する。(「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。」申命記 6:4)
- (3) 「神」と「民」は音が似ているので注意。明瞭に。(「我らの民のため、我らの神の町々のため、雄々しく戦おう。主がよいと思われることを行ってくださるように。」サムエル記下 10:12)
- (4) 「ハ行」の音は消えやすいので丁寧にはっきりと発音する。(「彼らは大きな苦難を通過してきた者で、その衣を小羊<こひつじ>の血で洗って白くしたのである。」黙示録 7:14)
- (5) 間<sup>ま</sup>については、特に文の中に会話の言葉の引用が入る場合、主語と述語の対応が混乱しやすいので注意する。(「人々は、『これでもまだ証言が必要だろうか。……』と言った。」ルカ 22:71 「人々は」の後の「、」を無視して「これでも」に続けると意味が分からなくなる。反対に、切るべきでないところで

切ってしまっていて分からなくなることもある。「深夜の <sup>こう</sup>更の初めに」士師 7:19 「深夜の」で切るのは不適切。）

- (6) 強調すべき言葉に留意する。大切な語が弱かったり曖昧で聞き取りにくいと、全体として「早すぎる」という感じを与えやすい。（「そして、イエスをゴルゴタという所——その意味は『されこうべの場所』——に連れて行った。」マルコ 15:22）
- (7) 聞き慣れない言葉は意識してはっきり発音する。（「オリーブ油を混ぜた十分の三エファの上等の小麦粉の献げ物、一ログのオリーブ油を <sup>ととの</sup>調える。」レビ 14:10）
- (8) 助詞を丁寧に。（「ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから……。」マルコ 15:15）ただし不必要に強調しすぎない。
- (9) 同じ音が続くときは不明瞭になりやすいので特に注意する。助詞の次の名詞の頭はあらためて丁寧に音を出し直すようにするとよい。（「あなたの掟を行うことに心を傾け……。」no okite 詩篇 119:112 「そこでまた、他の僕を送ったが」o okutta マルコ 12:4 「御腕の力の前に石のように黙した。」ni ishino 出エ 15:16 「彼に言った。」ni itta 申命記 31:7）
- (10) 連体詞、代名詞を丁寧に。（「わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。」エゼキエル 2:9 「わたしのすべての掟、すべての法を守り、それを行いなさい。」レビ 19:37）
- (11) 誤りやすい言葉に注意。（「このようなことは、かつて [<かつて>ではない] 起こったことがなく」ヨエル 2:2）

(2013/11/24)